

シンポジウム ④

子どもの傷害予防に取り組む

座長：山中 龍宏（産業技術総合研究所 デジタルヒューマン工学研究センター
傷害予防工学研究チーム長）

[シンポジウムプログラム]

● 科学的な傷害予防の展開

山中龍宏（産業技術総合研究所 デジタルヒューマン工学研究センター傷害予防工学研究チーム長、緑園こどもクリニック院長）

● 歯科医が取り組む傷害予防 ——長崎県佐世保市での取り組みについて——

福田英輝（長崎大学予防歯科）

● 企業が取り組む子どもの傷害予防

小野裕嗣（キッズデザイン協議会）

● 傷害予防活動を評価する

掛札逸美（産業技術総合研究所デジタルヒューマン工学研究センター）

1960年以降、0歳児を除いた小児の死因の第1位は「不慮の事故」であり、「外因による傷害」は小児の重要な健康課題となっている。

傷害には、起こる前、起こったとき、起こった後の3つの相があるが、人的、経済的に最も有効な対策は起こる前、すなわち予防である。傷害予防の重要性を指摘することはたやすいが、実際に予防することは大変難しい。予防とは、傷害の発生数・発生率の低下、重症度（入院日数、通院日数、医療費など）の軽減を数値で示すことである。

シンポジウムではまず傷害の実態、予防活動の具体例を示し、包括的な傷害予防の概念を紹介する。続いて、歯科領域の傷害予防活動としてどのような活動が展開できるか、また企業としてどのような活動ができるかについて紹介し、最後に、それぞれの活動を評価する方法について概説を行った。

傷害予防は、人・製品・環境といった多方面からの複合的なアプローチを要する。医療・保健関係者は、重症度が高い傷害を診た場合には、予防につながる情報を記録する責務がある。傷害の発生状況を記録することが、「予防」の出発点となるのである。

▶ Pick Up

歯科医が取り組む傷害予防 長崎県佐世保市での取り組みについて

長崎大学病院予防歯科では、佐世保市歯科医師会に所属する全131歯科診療所の協力を得て、日常的に発生していると考えられる軽度から中等度の口腔外傷の発生状況について調査を行った。対象者は、平成20年1月から12月までの1年間に、協力歯科診療所を受療した未就学の乳幼児とした。受傷者の属性や受傷の状況については、保護者に対して聞き取りを行った。また、口腔外傷の部位や種類については施術を担当した歯科医師が記入した。

調査期間中に93人の受傷者が報告された。受傷者は3歳児が最も多く、性別は女兒（42%）に比較して男児の割合（58%）が大きかった。受傷場所は自宅（屋内）が最も多く、次いで保育所・幼稚園であった。受傷状況は歯の脱臼が最も多く、受傷部位は左右上顎乳切歯の頻度が最も高かった。

これらの結果をもとに、平成21年度は、佐世保市幼児教育センターの協力のもと、保育所・幼稚園に勤務する保育士・教諭を対象とした外傷予防のための講演会を4回実施した。なお、講演会後に各園における口腔外傷への対応状況を調査したところ、応急処置マニュアルがある園は約2割、応急処置セットを常備している園は6%であった。

平成22年度は、佐世保市歯科医師会と協力して、佐世保市が発行する「子どもの応急手当・事故予防ハンドブック（仮称）」の作成支援を行った。今後、当ハンドブックは、乳幼児を抱える母親、および保育所・幼稚園に対して配布されることが予定されている。（福田英輝）